

図5：対象aと欲動の主体

*1 予測との誤差が大きい体験
(= 言語化されていない体験)
(= 経験に昇華されていない体験)
(= 「内的体験」)
(= 「トラウマ」)
(= 「〈物〉」) は、
その体験自体に中毒性があるため、
脳において「反復」される
(= 「反復強迫」)。

*E
(図4)

*F
(図4)

*6 経験に昇華されていない体験は、
ランダムで無秩序なものではなく、
独自の「内包」を持つ。

*7 シニフィアンの体系に参入する際に、
経験に昇華されていない体験も
同時に発生することになる
(= 「原抑圧」)
(= 「性関係の排除」)
(= 「一般化排除」)
(= 「疎外」)
(= 「エディプス第一の時」)
(= 「前エディプス期」)。

*9 対象aが意識に現れること (= 「対象aの顕現」) は、
「自身が採用しているシニフィアンの体系では
体験を説明しきれない」ことを
証明してしまうため、
その体験を統御できない「不安」と、
その不安を解消するための「防衛機制」を呼び起こす。

*10

体験が経験へと昇華されていない状態は、
「世界と体験との間に『葛藤』がある状態」
だと表現できる。

*G
(図4)

*2 予測との誤差が大きい体験を
予測できるようにしようとする機制を
「欲動」と呼ぶ。

*4
トラウマ的体験は、
「享楽」をもたらす。

*3 欲動の解消は、
それが経験への昇華に依らない
生理的なものであっても、
満足をもたらす。

*5
予測誤差を体験したとき、
概念に収まりきらない
「存在」を人は感じる。

*8 原抑圧により生じる、
独自の内包を持った反復強迫する体験が、
「対象a」（＝「〈物〉の断片」）である。

*12 主体による欲動に対する防衛は
速やかに行われる。

*11 対象aの顕現は、
「大他者の非一貫性（＝ \mathcal{A} ）」
（＝「象徴界の穴」）を露呈させる。

*13 「葛藤」を解消する行為を
行うものを
「主体」と呼ぶ。

*14 葛藤の解消と、
主体の行為と、
対象aの顕現に対する防衛とは、
等価である。

*K (結節点1)